NO １８９　　２０２２年３月７日

１学年だより

夢の宅配便

１年学年主任
水野　喜代治

自分を変えるのは自分　NO１１

人は、それぞれ長所と短所があります。また、得意な事もあれば苦手な事もあります。長所や得意はより伸ばし、短所や苦手なことは改善していくことが大切です。それは、分かっていますが、だれもがなかなか思うようにできないものです。

小学校の中学年頃まで、私は教室を飛び出して授業をさぼってしまうことがよくありました。そのため、国語や算数などの基礎学力が身につかず、授業の内容についていけなくなってしまいました。そのため授業中は、ノートに落書きをしたり、先生にわからないように寝ているような授業態度が続いていました。中学校に進学しても、授業態度は変わらないままで、毎日のように教科の先生に注意されていました。学校での生きがいは放課後の部活動でした。私の母が、「喜代治は頭の良い子に産んでいるので大丈夫です。」と笑いながら言ってくれていたので、勉強がわからなくても、私は悲観的にはなりませんでした。こんな調子で中学校１年生は終わりました。しかし、以前にも紹介しましたが、２年生に進級したときに自分を変えようと決心する出来事にぶつかります。「一生懸命に勉強しよう。」と心から思いました。何も授業に参加しないで、寝ている自分が嫌になりました。授業中に友達に話しかける自分は迷惑をかけていると思いました。ノートも取らずにプリントも書かない自分が恥ずかしいと思いました。

自分を変えようとしたきっかけは、隣の席の女の子（学年トップクラスの才女）の藤沢さんに、「喜代治、ちゃんとやってよ。」と注意されたことでした。私は、「喜代治」と呼び捨てにされたことにびっくりしました。みんな、私のことを「キヨちゃん」と呼んでいたのに、その女の子に呼び捨てにされたことがショックでした。「喜代治でなくキヨちゃんだよ。」と言い直させましたが、彼女の「ちゃんとやってよ。」という言葉も私の心に響きました。考えたら、授業中に話ばかりしているし、ノートも取らずに寝ていたり、みんなが勉強を頑張っているときに、自分は何も取り組んでいないことに気づいたからです。私は、自分がひどくちっぽけな存在に感じて自己嫌悪になりました。そして、自分の中に勉強を頑張ってみようという気持ちが高まって、「自分なりに全力で勉強を頑張る！」と決心しました。

漢字も読めなかった私は、母に教科書にすべてひらがなを振ってもらって、社会の教科書を毎日、写経のようにノートにそのまま書き写しました。これは、社会科の国見先生が、「毎日習ったところの教科書を写すことをテストまで続ければ必ずできるようになる。」とアドバイスしてくれた勉強法です。毎日、毎日、自分を変えようと努力しました。鉛筆はすぐに芯がなくなるので、ボールペンを買ってもらって、ボールペンで写しました。テストで初めて、社会科が５０点を超えました。いつも一桁の私が半分できたわけです。体全体が熱くなるほどうれしかったです。次のテスト、また次のテストでだんだん点をあげていき、私は、ついに８０点を超えました。国見先生が、テスト返しの後にみんな前で「このクラスで頑張った生徒がいます。８０点超えました。それは水野です。」とほめてくれました。クラスのみんなが「えーっ！すごい！」と拍手をしてくれました。その中に藤沢さんも大きな拍手をしてくれていました。私は嬉しくて、自分を変えようと決心して良かったなと改めて思いました。